

図 書 紹 介

H 5 N 1

強毒性新型インフルエンザウイルス日本上陸のシナリオ

岡田晴恵（国立感染症研究所）／発売元：ダイヤモンド社／

〒150-8409 東京都渋谷区神宮前 6-12-17 / TEL 03-5778-7240（販売）／

B 6 版／292 頁／価格 1600 円（税別）／2007 年 9 月 13 日発行

グローバル化に伴う「リスク」管理が叫ばれているが、日本では鳥インフルエンザなど新型ウイルス流行への対策が不十分である。一旦新型ウイルスが上陸すれば感染者は、最短 4 日で脳炎や多臓器不全で死亡、その数は 210 万人以上、致死率は 60% 強との予測もあり、全国民に接種できるワクチン確保が緊急の課題となっている。

本書は、国立感染症研究所の現職研究員が警告する脅威の新型ウイルスの日本上陸シミュレーション・ストーリーである。

序章は、1997 年 5 月 香港・第一の犠牲者、1997 年 11 月 香港・鳥インフルエンザ発生、1997 年 12 月 香港・ウイルス根絶とその「火種」から始まり、第 1 章では、2006 年 1 月 大阪府・R 市立 S 病院副院長沢田弘の「苦悩」、第 2 章では、福岡航空検疫官溝腰健治の「焦燥」、第 3 章では、大阪市 S 区 保健所長伊藤由起子、東京都品川区 保健所長向田ヒロミの「焦燥」と続く。第 4 章では、2007 年 10 月下旬 ゲマイン共和国で新型インフルエンザ発生、11 月 1 日 日本国内 ゲマイン渡航者、11 月 1 日 ゲマイン共和国・離島 K 島での感染そしてフェイズ 5 へ、11 月 2 日 日本・備蓄ワクチン接種準備開始とその「発生」状況が、第 5 章では、11 月 3 日午後 8 時 シェ革命記念国際空港、11 月 3 日午後 福岡空港検疫所、11 月 3 日夜 福岡・柳 正一（輸入雑貨販売業）の自宅、11 月 5 日午前 0 時過ぎ 救急病院、11 月 5 日午前 9 時 「フェイズ 4 B 国内発生」宣言、11 月 6 日 福岡・接触者の追跡とその「上陸」状況が、第 6 章では、11 月 4 日 香港－成田国際空港 木田純一（大手商社勤務）、11 月 6 日午後 疫学チーム調査開始、11 月 5 日 大阪・関西空港とその「拡大」が、第 7 章では、11 月 12 日夜 フェイズ 5 B の通知、11 月 13 日～16 日 大阪・発熱センターの惨状、11 月 16 日 WHO 本部地下感染症アウトブレイクコントロールセン

ター、11月16日夜 内科開業医・吉川クリニックとその「連鎖」反応が始まる。第8章では、11月18日早朝 伊藤保健所所長の絶望、11月23日深夜 大阪・吉川クリニック休診と壮絶な戦いが続き、その「混迷」を深め、第9章では、11月18日 厚生労働省・パンデミック宣言、11月20日 国内猖獗とインフラの「破綻」、第10章では、11月30日 医療従事者の過労死、12月12日 東京都内・犠牲者の埋葬と社会が「崩壊」していくさまが描かれている。

どうしたら防げるのだろうか。具体的な対策はあるのか。その答えを著者が新書「H5N1型ウイルス来襲－新型インフルエンザから家族を守れ!」（角川SSC新書、2007年11月13日発行）の中でより具体的に記述しており、対策ハンドブックとして参考になるので、本書と併せて読んでほしい。

なお、この「新型インフルエンザ」の大流行に備えて、国では感染症法や検疫法の改正案が来年度の通常国会に提出される段取りになっている。その感染症法案では新たに「新型インフルエンザ」の項目を新設して患者が発生した場合すぐに入院措置が講じられるように感染の可能性のある人の外出自粛や健康状態の報告を都道府県に国が要請できるよう、また、検疫法案では、海外で流行し、感染した可能性が高い入国者が多数に上った場合、感染した恐れがあるが発熱の症状がない場合でも医療機関以外にも隔離したり、隔離した宿泊施設で、発生するかどうかの監視できるようにするなどが盛り込まれているとのことである。 (学会事務局)